

研究ノート

『場所をつくる旅』について

About “THE JOURNEY TO MAKE A PLACE”

前林 明次

MAEBAYASHI Akitsugu

沖縄への眼差し

2011年3月に「嘉手納基地周辺の中学校で103.1dBという騒音によって卒業式が中断された」というネット上で目にした記事がきっかけで、2012年11月にはじめて沖縄を訪れ米軍基地周辺でフィールド・レコーディングをおこなった。私は当時作品制作のためにアンビソニック方式という全方位の空間音響を録音、再生するシステムを導入したばかりで、新聞やTVなどのメディアでは伝えようがない103.1dBという「音響」を、現地において精密に記録し、別の場所において再生することができないかと考えた。

そしてこの試みは2013年の岐阜おおがきビエンナーレにおいて《103.1dB》という作品として発表された。そしてその後も沖縄の基地周辺でのフィールド・レコーディングを継続し、2016年6月にはウェブの3D地図上に騒音をマッピングし、ストリートビューの視点からその音響を体験する《OKINAWA NOISE MAP》(okinawa.

noisemap.jp) というサイトを立ち上げた [図1]。

線の絡まりを見出す

このように2016年までは、沖縄という場所に目を向けながらも、基地騒音の空間音響の再現とそれを伝えるWEBメディアの制作といったように、外見的には騒音被害という社会問題にウェイトを置きながら活動をおこなってきた。しかし、2017年の岐阜県美術館における『場所をつくる旅』においては、同じ沖縄をフィールドとしながらも異なる展開を模索することになった。それは、端的に言えば「表現の場」へ立ち戻る、ということである。沖縄という場所、岐阜県美術館という場所、私が作家として音や技術をどう捉え、なにを問題にしてきたか、そのようなもの同士のかかわりをもう一度とらえなおし、「表現の場」にどのような応答が可能なか。そのような課題として『場所をつくる旅』の制作に取り組むことになった。



図1 《OKINAWA NOISE MAP》

そこでひとつのインスピレーションとなったのが、「場所」を点の集合体としてではなく、線の複雑な交差や絡まりの密度としてとらえる議論である（ティム・インゴルド『ラインズ 線の文化史』工藤晋訳、2014年）。そのような「場所」では、さまざまな「線」による関係の様態が考えられる。私がサウンド・アート、メディア・アートのなかで取り組んできた作品制作の変遷、2012年から沖縄で現地を歩き、観光をし、さまざまな人々と出会い、風景のなかで考えてきたこと。岐阜県美術館で山本芳翠（岐阜県恵那市出身で、パリから帰国後、伊藤博文首相に随行し数点の沖縄の風景画を残した）の《琉球漁夫釣之図》（岐阜県美術館所蔵、1887-1888年）と出合ったこと。本展示においては、そのようにさまざまな「線」の萌芽を出発点として、それらを「旅」という方法によって縦横にのびし、その微細な線のいくつかを「表現の場」において再接合してみる。そのような試みとして「作品」を仕立て、展示を組みあげていくことができないかと考えた。

展覧会として「場所を作る」

それでは、『場所をつくる旅』を構成する4つの作品を紹介しながら、そこにいたる経緯と、背景にある考えについて述べていくことにしたい。

《沖縄海岸風景アップデート》[図2]

2016年後半から、山本芳翠の沖縄に関する絵画についてのリサーチをはじめ、学芸員とのやり取りから、岐阜県美術館に《琉球漁夫釣之図》が所蔵されていることを知る。そして、2017年2月に学芸員による協力を得て、本絵画の展示作業の様子と絵画の撮影をおこなった。それがこの「旅」の事実上の出発点となる。

展示室入り口前に設置された映像作品、《沖縄海岸風景アップデート》は、二人の学芸員によって《琉球漁夫釣之図》が手際よく壁にかけられていく様子と、絵に照明が当てられた途端に浮き出てくる「海岸風景」の描写からはじまる。その後が続くのは、およそ130年前に山本芳翠が訪れただろう、那覇周辺の海岸の現在の映像や、さらに現在の沖縄の海岸を特徴づける、嘉手納基地から飛び立つ戦闘機を頭上に子どもたちが浜辺で遊ぶ風景、護岸工事中の辺野古の海岸風景などの映像である。

《6 walks with metronome》[図3]

この作品は2003年に発表して以来、バージョンを変えながら継続して発表してきた《metronome piece》という作品がベースになっている。テンポ=60（1秒間に1回の間隔）に合わせたメトロノームのクリック音を「ソナー」として見立て、その反響を様々な空間で記録し、いま、ここにあるメトロノームに重ねることで時空間の二重化を体験する作品である。

2009年、NTTインターコミュニケーションセンター[ICC] 無響室でおこなった《メトロノームと無響室のための作品》以降[図4]、展示することはなかったが、その理由については、『OS10 アートとメディア・テクノロジーの展望 ICCオープン・スペース10年の記録2006-2015』（ICC、2016年）で、「閉じたループの外へ」という寄稿で触れた。テクノロジーによって精度を極めた聴覚的記録の再現は、それ自体が閉じた回路から生じているにもかかわらず、感覚器官を欺くには十分な刺激と身体的な反応をもたらす。テクノロジーがそのようなレベルに達したとき、必要なのは、どのようにリアルかではなく、「リアルとはなにか?」という根本的な問題に立ち返らざるをえないという趣旨である。つまり、「再現」がもつ表現上における可能性とは、それを媒介するもの（＝技術）の高精度化によって、「再現するもの」と「再現されたもの」の区別が宙吊りにされ、私たちの知覚の働きが意識化されることにあると考えられる。しかし、媒介する技術の高精度化の影響は想像以上に強く、知覚の働きが意識化される前に、私たちの感覚を馴致してしまうおそれがある、ということである。おそらく私たちは身体のためにも、技術をとどめおくための技術（＝技法）を「表現の場」において模索し続けなければならないだろう。

このような問題意識を背景に、本展では、再度メトロノームを使った作品制作に取り組んだ。《6 walks with metronome》では、沖縄で恣意的に選んだ各所において、メトロノームを鳴らしながら遊歩に興じ、その録音をおこなっている。空間の反響をたたみ込んだクリック音が埋め込まれた6つの歩行の記録は、展示空間において鑑賞者を取り囲むように置かれた6つの各スピーカーから聞こえ、それらは重なっては消え、を繰り返す。この作品は、なにかの再現ではなく、「表現の場」において鑑賞者の頭の中に委ねられ、生成する音の運動体として提示される。



図2 《沖縄海岸風景アップデート》
『場所をつくる旅』 岐阜県立美術館、2017年

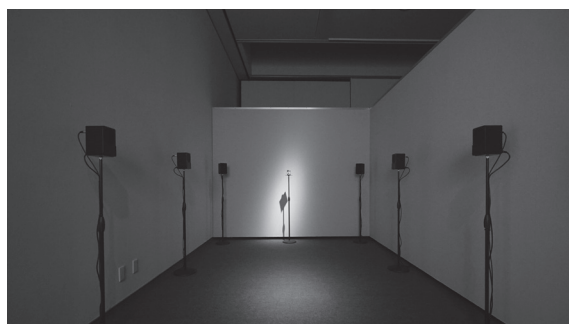


図3 《6 walks with metronome》
『場所をつくる旅』 岐阜県立美術館、2017年



図5 《〈琉球漁夫釣之図〉のための沖縄音響合成》
『場所をつくる旅』 岐阜県立美術館、2017年



図4 《メトロノームと無響室のための作品》
『OPEN SPACE』 ICC、2009年



図6 《Container For Dreaming》『歌舞伎町アートサイト』 2011年

《琉球漁夫釣之図》のための沖縄音響合成》[図5]

正面の壁に掛けられた山本芳翠作の《琉球漁夫釣之図》を4チャンネルのサウンドシステムによって取り囲み、2015年から2017年の間に沖縄各所でフィールド・レコーディングされた音響を合成し、再生する作品である。

タイトルにある「音響合成」(synthesis of sounds)とは、音響による場所の表象や再現にとどまらず、私たちがもつ場所のイメージを積極的につくりかえていくための音響の構成法のことである。そしてこの鑑賞体験には、意図された、いくつかの「無理」がともなうことになる。ひとつは、さまざまな沖縄の環境音がひとつの流れとして合成され、絵画とともに再生されるという「無理」、もうひとつは、絵画とサウンドシステムによる音響を合わせて視聴するという、メディア体験としての「無理」である。本作品においてこのような「無理」があえて導入されるのは、「再現」の可能性を断ち切った上で、どのような「イメージの場」が切り開かれるかを問題にしているからである。

私が自作の中で「合成」(synthesis)ということばを最初に使ったのは、2011年の『歌舞伎町アートサイト』で展示した《Container For Dreaming》という作品においてである[図6]。新宿歌舞伎町の広場に置かれたコンテナの内部空間をベッドルームとして仕立て、鑑賞者がベッドに横たわると、薄明かりの中、サウンドシステムから予め録音され、編集された新宿の音響群が再生される。コンテナの扉は開放されており、屋外のノイズが部屋に侵入し再生音と混ざり合い、鑑賞者にとってそこがコンテナの内部なのか外部なのか曖昧になる。鑑賞者はこのように内と外、覚醒と半覚醒の間で、場所に対するイメージを自らの想像力によって「合成」することが促された。

「場所のイメージの合成」というアイディアにとって大きなヒントとなったのは、1970年代のニューヨークで、人がいない公共の場に出かけ、そこで眠り、見た夢の印象を写真記録とともに残したローリー・アンダーソンである(《Institutional Dream Series》、1972-1973年)。そこで作家は、自らの身体を媒体として、制度の場がどのように個人の夢に影響をあたえるかを測る実験をおこなった。さらに、このような場所と身体、イメージをめぐる問題については、同じく70年代後半に、カナダの地理学者エドワード・レルフが『場所の現象学—没場所性を越えて』(訳: 高野岳彦、石山美也子、阿部隆、

1991年)で、私たちのもつ「場所の感覚」が所与の環境から一方的に影響を受けるばかりではなく、私たちがもつ潜在的な力によってもつくり出される可能性について指摘している(例えば、アニメ作品などで何でもない地方の風景が取り上げられることでそこが「聖地」化する現象などがあげられるだろう)。つまり「場所のイメージの合成」とは、環境と身体との相互作用において作動する、私たちに内在する力を示唆しており、そのような力をいかに活性化するかが「表現の場」における課題と考えられるのである。

《沖縄海岸風景 - 糸満》[図7]

本展が開催されるおよそ1ヶ月前、2017年6月の沖縄への旅行の目的のひとつは、《琉球漁夫釣之図》が当時どこで描かれたかを特定し、その場所の風景と音響を記録するということであった。この作品《沖縄海岸風景 - 糸満》は、入口に配置された映像作品《沖縄海岸風景アップデート》と呼応するように展示の最後の空間に置かれた。

この映像作品では、《琉球漁夫釣之図》の絵画の細部、菊の紋章が彫り出された黄金の額縁、漁夫が身につけた帽子、彼らがのる「サバニ」と言われる小舟、浜辺付近の漁村の集落、浜辺から沖に向けて描かれる虹などがクローズアップされ映し出された。その後続く、糸満市在住の専門家へのインタビューでは、明治20年頃の沖縄本島では、絵に描かれているような海岸沿いに漁村の集落があったのは糸満以外にないことから、この絵が糸満の海岸風景をもとに描かれたことを確信しながらも、場所を特定する決定的な地理的特徴が描かれていないことが語られた。さらに専門家は、絵に描かれた海岸線に沿った小道が現在の旧道331号の辺りであるとするれば、白銀堂という拝所^{ウガンジュ}の周辺にその面影が残っていることを教えてくれた。私はその周辺を歩き、そこに祀られている崖と岩の佇まいをしばらくのあいだ眺め、映像を記録した。もはや当たり前のことではあるが、現在となっては糸満の海岸線は埋め立てられ、当時のような自然な浜などはどこにも見出せない。作品は、人工的につくられた浜辺において《琉球漁夫釣之図》を模したアングルで撮影された風景で終わる。

「無理」と「再現」

『場所をつくる旅』においては、山本芳翠作《琉球漁



図7 《沖縄海岸風景 - 糸満》『場所をつくる旅』岐阜県立美術館、2017年

夫釣之図》を起点に、私が近年、沖縄という場所をめぐるなかで見出したいくつかの「線」をひろげ、美術館という「表現の場」において交差させ、接合させることを試みた。これまで本展を構成した4つの作品を振り返りながら、制作にいたる経緯や、背後にあるコンセプト、そこからひろがる問題意識について述べてきたが、最後にその要点についてまとめておきたい。

まず2009年の《メトロノームと無響室のための作品》において見出した、音響再現技術の高度化によって、コンテクストという媒介を経ずに感覚に作用してしまう閉空間をどのように乗り越えるかという課題があった。これについては、2013年の《103.1dB》（岐阜おおがきビエンナーレ）や、2016年の《OKINAWA NOISE MAP》の活動を、3.11以後に顕在化されたメディアの機能不全による社会の「内部」と「外部」の遮断という問題とリンクさせ、既存メディアが扱えない音響的「現実」を、いかに高度な再現技術によって社会の内部へ導けるかという情報伝達の可能性として模索してきた。

そして2017年の『場所をつくる旅』では、「場所のイメー

ジの合成」というキーワードによって、私たちを取り巻く記号的なものに働きかけ、思考を動かすための「表現の場」の可能性について取り組むことになった。とりわけ、《琉球漁夫釣之図》のための沖縄音響合成》では、再現の可能性をあえて遮断するために「無理」ということばを肯定的に使用した。私の意図するところでは、「無理」とは「未だ理が無い状態」とでも呼ぶべきもので、どのような分野であろうと、テクノロジーが新たに開発され応用されるときに不可避免的に生じる事態のことである。そのような事態を媒介として、私たちはあらたな「イメージの場」を開くことができるだろう。

一方、再現がもつ問題は、再現される現実がどのようなものであれ、再現それ自体がある現実を固定化し、強化してしまうことにある。それゆえに私たちは、「現実」とよばれるものをひとつの「合成（体）」にとらえなおしていかなければならない。イメージの合成（体）としての現実とは、都度、生成され、うつり変わるのみである。そこでは私たちに内在する力としての想像力がつねに活性化されているだろう。